

## 十六、はぎのお萩尾が来てから

篠栗町の自治区のうちには、尾仲や庄のように一五〇〇戸を越える区もあれば、一方では萩尾のように四〇戸そこそこの区もあります。

この小さな萩尾区について、明治の頃から、次のような話が伝えられています。

篠栗小学校の先生が、教員の集まりで福岡市に出られました。すると会議の合間に、若い女の先生が寄つてこられて「篠栗には萩尾という村があるはずですが、どんな村ですか」と聞かれました。そしてなぜそんなことを聞くのですかと問いかえず篠栗小の先生に、次のように答えられたそうです。

「私の母は子供のころ、萩尾から来た子守さんに字を習つて、それで一生読み書きに不自由しませんでした。私は教師になって以来、幼い女の子さえ人に教えるほど読み書きができるような村とはどんな村だろう

うと思いつづけてきました。ぜひ一度たずねてみたいのです」

また、こんな話もあります。

区長会があると、さすがに遠い萩尾の区長さんが遅れられることがありました。待ちかねた区長会が何かを決めていると、萩尾の区長さんがやってきて「なんな、あなたがたあ、そげなだちやかん（埒が明かない）こと決めてからに！」と一喝いっけつされ、なぜそれが「だちやかん」かを指摘されると、誰もがぐうのねも出ないのでした。そんなことから区長会では、何事も「萩尾が来てから」が、ひとつ言葉になったそうです。

江戸時代以来、萩尾村では寺子屋教育が進んでいて、村の人も見識が高く、ほかの地区から一目おかれる存在だったことが分かります。しかもその教育は武家的な教育で、そのもとをたどつていくと、戦国時代の末に萩尾に居を構えた萩尾大学という武将にいきつくという説もあります。萩尾大学をめぐる話は長く複雑で、簡単にはあつかえないので、ここではふれないでおきます。



萩尾区の中心部。萩尾分校は区の集会所を兼ねていて、毎年秋には「山の分校ふれあいフェスタ」が開かれ、三百人もの人を集めています。